
初めての患者 処女作 & 習作

Yn

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初めての患者 処女作&習作

【Nコード】

N7312P

【作者名】

Yn

【あらすじ】

主人公、玲央の精神科医になろうと決心した闘いの出発点。

（前書き）

Y nの最初に書いた（処女作の）作品です。
精神科医になろうと決心したときの物語です。
これは、かなり駄作なので、悪しからず。

俺は昔から理屈っぽくて周りから変人扱いされてきた。確かにこの年齢で、断食が趣味だし、血が怖いし、宗教向きだし。でも、我ながら勉強は出来る。特に倫理が得意。

そんな俺は高校生。周りの奴の事を「こいつらとは違う」と思って誰よりも誇り高い性格の人物。

家族は、父親と母親。父親は、昔、違う女性と同棲していた。俺は、父親が大嫌い。だが、父親は、指折りの精神科医。

俺の学校は、通信制で、日、月、火曜日に学校に行けばいいというもの。

今は、3時限目。大好きな倫理だ。授業中、隣の席の水野が

「なあ……鬼丸。学校の帰りゲーセン行かね？」

「俺、午後から親父の病院行くから」

「病んでるね」

「るせーよ」

そうとも、病んでいる俺は、倫理の先生に自殺の話したら、「何で死を重点に置くの？」って突っ込まれた。自殺は、哲学者が何百年じゃきかないくらい悩んできている。俺みたいな高校生では、わからない答えだ。哲学者は病んでいる。だから俺は、大学の哲学科を卒業し、哲学者になろうと思う。俺は、幼稚園の時、「何で生きているのだろうか？」と悩んで鼻血を出した事がある。母さんが心配したかな？あれから色々自然を観察して、「宇宙ってどうなっているの？」「あの美しい夕焼けをつくったのは誰？」「何で生まれつき皆、能力、外見、性格が違うの？」と親を困らせていた。俺はずっと解決できずにいる疑問がある。それは、何故、皆、性格が違うのだろうと言う事。性格が良ければ警察に逮捕されないだろう。犯罪者は育ちが悪いだろう、きつと。そういう風に望んで生まれて来た訳ではないのに何故、悪人にならなければならないのだろう。

こればかりは、絶対に譲れない疑問だ。出来れば全能の神に近い人が幸せになれるだろう。

俺は、そういうことを考えながら授業を受ける。周りの奴は、携帯をいじったり、眠ったりだ。後ろの席の奴は喋っている。こういう風に色々な人がいることを観察できるのは、俺が一番優れていると思う。昔から敏感すぎて、病院に入院したほどだ。この敏感さは、病院の薬で制御している。薬を飲んでいても感じてしまうほどに。薬を飲んでいなかったら俺はどうなっているのかな？30歳くらいで治まると親父は言っていたが。永遠に精神不安定な人は診たことが無いと親父は言う。

俺は、窓の近くで、授業も聞かずに外ばかり見ていた。たまに水野を見ると外の世界から中の世界に入っていく感じ。外を見るだけでもう冒険した気分。

水野の隣の席の男子、耳をふさぎ、目をつむり、地団駄している。何事だ。体が震えている。俺が見るとこの男は、病んでいる。長年病んでいる人を見ると病んでいる人を見分けられる。これは、俺、特有の目。どうせ、これから親父の病院行くんだけどちょっと遅れでもいい、この男を尾行してみるか。

男は、昼休み、トイレに向かった。俺は付いて行つた。周りの生徒がガヤガヤ騒いでいるが、こいつはオドオドしている。個室のトイレに入った。ちょっと声が聞こえる。

「俺は、死んじやう。きつと俺は殺されるんだ」

声が変わった。しかし、この声、何回か病院で聞く人だ。

この男は、4時限目も出るらしい。俺はこれから病院へ向かう。しかし、大丈夫なのだろうか？俺が思うにこれはきつと被害妄想だ。この男、170あるかなしで、体型も普通。後ろ姿は、ちょっと不潔感がある。ズボンにTシャツを入れている。あくびをしているところが目立つ。

「じゃあな、水野。俺は、帰るからな」

「俺、理沙ちゃんとゲーセン行くわ。もうお前なんか誘わねえ」

「それは、結構」

月嶋病院は、俺の故郷。中学生の時に入院して以来、月に一回、外来にやってくる。おかげで、鬱はどれくらい辛いかわかる。大好物のパンを食べながら昼を越す。パンは、食べやすい。それに色んな味があるので、楽しめる。パンを食べていると周りの空気を無くしてくれる。俺は、すぐに周りが自分の事を見ていると気になるが、パンを噛んでいる間に緊張感を無くしてくれる。噛みながらボーっと無表情でいるのもとても楽しい。良く噛むことも瞬間づいているしね。パンを食べてから俺は、精神科の受付に行った。今回は忙しい親父が昼飯を持ってくるのを忘れていたので、届ける。

「加藤さん、父親の食事を持ってきました」

「玲央くん、こんにちは」

俺と看護婦は、病棟や父親の関係で仲が良い。俺は、わりと子供より大人と過ごしてきた時間が多い。優越感に浸っているのか、同級生と話すと話のレベルが合わなくてぬるい。若い人は、年上の人と話しにくいし、年上の人は、若い人と話しにくい。これだけで、日本の日本語が狂ってきている。

俺は病棟を出ようとするが見つけた。学校にいた被害妄想をしていた謎の男が。Ｔシャツにズボンを入れている姿でわかった。外来の待合室に座っていた。通信制、山彦高等学校は、病んでいる人が多いのか。ＤＳをやっている。眠そうだ。こつくりこつくり、とやっている。ＤＳを落とした。俺は拾ってやった。

「すみません」

この人と目が合った。向こうも何やら気が付いた様で……。

「あんだ、学校で俺をつけてた奴？」

「知ってたんですか」

「看護婦といつも話していて、病院に来ている鬼丸先生の息子？」

「それは、個人情報ですよ」

「鬼丸先生はいつも診てくれる時間が少ない……。貴方、相談に乗ってくれない……？」

「少しなら……」

この男、なれなれしくするところがある。話すと、被害妄想が凄くて、夜も眠れないらしい。俺の推理は当たっていた。不眠症は俺の経験では考えすぎる人になりやすいと思う。小説書きとか哲学者とか科学者とかね、案外眠れる人は気楽な人やあんまり考えない人が多い。

「薬ちゃんと飲んでますか？」

「あ、薬ですか。忘れてた」

薬を飲んでいないから被害妄想になったのだ。この男……。大丈夫なのだろうか？

「被害妄想、大変ですよ。俺もなったことがあって。布団にこもってた」

俺が話すと男は目を大きく開けた。

「なんかあんたって鬼丸先生より相談の乗り方、上手い。あの人、ナンカキツイ」

「……とりあえず、電話番号教えます。良かったらメールして下さい」

「俺、友達なんていなくて……。あんたが初めてですわ」

「あ……っそう」

俺も友達は少ない。電話番号を教えたのは、こいつが患者だからだ。「良かったらゲーセン、行きませんか？」

俺、なんつーことを。こいつに相当おせっかいな気がする。

「ゲーセンって何？」

「……」

俺は少しこいつを高校生か疑った。こいつは、今時の高校生じゃない。でなければここまで天然なはずがない。

「俺は、鬼丸玲央」

「俺は、おかもと まさし岡本雅史。高校2年生で、169cm、62kg。血液型は、O型。するめいかが好き」

「……名前だけで、いいよ」

水野よりこいつの方が良かったかもな。

東京駅を回っているだけで、今夜、俺と岡本は、友達になった。

そして、夜になり、駅からの帰り、俺は、夜の散歩を楽しんでいた。6人くらいで一緒にいる男子の同級生が現れた。そして、いきなり俺に話しかけた。

「なんかお前、中3の時、突然、姿消したよな？」

「そうなんだな、姿消したな。下らない先公の授業に飽きたから」

「とかいって全国模擬試験1位じゃんか」

「山彦高だけどね」

俺は喧嘩を売らないように穏やかに言う。6人はすぐ去った。多分、俺のことが中学のクラス中に広まったからだろ。小学校の時にも俺が噂になったことぐらいあった。

朝、起きたら9時、遅刻だ。俺が寝坊なんて珍しい。

「玲央、熟睡だったよ。起こそうとしても起きなかったよ」

母親は言った。俺は急いで学校に向かった。これでも中学生の時は、病棟にいた時、毎日、13時間寝ていた。良くなった方だ。

「よっ！鬼丸、遅刻だな」

ロングホームルーム

水野は俺に話しかける。遅く入った俺は、LHRの時間だった。男子も女子もジロジロ見ている。中にはひそひそする生徒もいる。皆、俺が遅刻したのを驚いているみたいだ。

「おい、鬼丸。高校生にもなって、寝坊してるのか？！」

この担任の先生、下永と言い、俺に目をつけ、いつも声をかけてくる。何かといつも俺のところに常にいる。こいつ・・・ストーカーだ。被害妄想？いや、この先公、俺がよっぱど気に食わないらしい。いつも目線が常に俺にある。下永は、噂では、昔、イラストレーター、キャラクターデザイナーをやっていたらしい。かなりのオタクだ。今は、理科教師。冬でもいつでも同じTシャツだ。

「うつ病なの？鬼丸玲央ちゃん」

その上に空気が読めない。フルネームでしかも「ちゃん」付け。更

にうざい。

「そういう貴方は、何人なにじんなんですか？下永先生」

「……はい、無視」

生徒は、笑い始めた。漫才を見ている様な楽しみ方だが、俺は楽しめない。この先公もだ。岡本が俺を見ている。げらげら笑う。

体育の時間になった。水野、岡本と一緒に行動することになった。

「岡本。お前、鬼丸とゲーセン行ったのか？」

「うん、行った。クイズは、俺が負けた」

「何だ、鬼丸。俺を裏切ったのか？」

「病院で会ったからさ」

この水野の話。いつもひがんだ事を言ってくる。彼女と行動すればいいものを……。いつも俺に突っ掛かってくる。

「何で寝坊したのヨ？」

「……何だよ。たまたま寝坊しただけだよ。」

体育教師にも「おい！鬼丸、水野、岡本。」と怒鳴られた。出席表を渡せなかった。最近、不運続き。

「今日も病院行くの？岡本。」

「俺は軽症だから。2週間に一回だよ。」

軽症なわけがない。俺も重症の時、週に1回通っていた。俺からすればこいつは、重症だ。親父……あのヤブ医者が！学歴は、早稲田並って言ったって、駄目じゃなか。とりあえず、俺は病院に行こう。電話が鳴った。岡本からだ。

「なんか尾行されてる。皆、俺のこと見てる。あの角の人が俺を刺そうとしてる。皆が、俺の悪口言ってる。歩き方が変だとか」

「岡本。お前は、何にもされていないよ。しっかりしろ。今、どこにいる？」

「東京駅。怖い。早く来て！」

裏返った声で、世話のやける奴だ。親父に電話した。

「玲央、どうした？」

「俺、あんたんとこ行けないね。あんたに恨みあるから」

「まだ根に持つてるんだな。」

「俺は、恨み深いから。後、50年は忘れないね」

「その頃には、67歳の爺さんだね。あー若い、若い」

皮肉屋のジジイめ。相談に乗るのは上手いけど、あんたには愛が足りない。要するに口が上手いだけ。ご飯は売店が買うだろうからもう親父のとは行かない。俺は少し怒りながら岡本の所へ。可哀想な岡本……。ここまで被害妄想になったのも、周りの家族や他人に酷い事をされて、病気になる。人間とは不平等である。病気になるいたい人なんて1人もいないんだ。

西洋医学というのは、暴れた人間を隔離病棟（通称：保護室）というのに入れられるのだが、暴れている人間を「こんな奴だったなんて。」と思わせない為に入れるらしい。未だに俺はそれが理解できない。医師（親父）は愛情だというのが……。。

下永もあいつも変だから色々からかわれただろうに。そういえば、この前、生徒にからかわれて、叫んだのを見た。あいつ、友達いないんだ。

「岡本、大丈夫か？」

「鬼丸くん。鬼丸くんだけだ。俺を普通に扱ってくれるの」

「ちゃんと薬飲んでるか？」

「俺、もう外歩けない。突然、刺されるかもしれない」

「俺がいるから大丈夫だ」

岡本は、俺の後についた。男同士でこんな会話。まあいいや。岡本は可愛いんだ。こういう人には何の害もない。そういう風に生まれてしまったから仕方ない。それを助けるのが、精神科医の仕事だ。

岡本ほど被害妄想になるのは危険だ。頭が動きすぎている。頭で動いているからこうなる。俺はちょっとイライラしながら、歩いている。横を見ると何か手首に不思議と何かを感じた。岡本はリストカットの跡があった。

「どうした？岡本。その手首の傷」

「怖くて、俺の体をお仕置きしなきゃと思って」

ばか！自分の体を攻撃してどうする？リスカのわけは、とても辛かったからだろう。でも、本当に心配してくれそうな人の前でしなければ、誰も死にたい事を心配してくれないだろう。病院に通っているから、親も満更知らないわけじゃなさそうだが。親から貰った大切な体じゃないか。俺ならリスカは絶対しない。

「薬を飲まないと被害妄想になるよ」

「薬飲んだら喋る時、おかしくなるし、のど渇くから。」

「医者から出された薬なんだから、ちゃんと飲みな。そうしないともつと苦しむことになるよ」

岡本は俺にしがみつく。男同士で、こんなとこ見られたら恥ずかしい。女みたいな男だな。

そのまま俺は岡本の家に遊びに行くことになった。お袋さんは俺に好感を持ってくれた様で、俺の大好きなパンをいっぱい出してくれた。

「まさちゃんの友達なんて初めてよ」

「まさちゃん？」

「鬼ちゃんってうちのまさちゃんの事、想ってくれてるのね？」

「鬼ちゃん言わないで下さいね、お袋さん」

夜、もう遅いので、岡本と2人で寝ることになった。つまりお泊りだ。寝る時に岡本は、指をくわえて寝ていた。俺は反対方向に顔を向け寝た。人の家は寝にくいな。人の家は感性が敏感な俺にとってはすぐ感じてしまうのだ。11時、岡本は、起きていた。

「鬼丸くん、俺、寝るのに1時間はかかるんだ。いつも10時間くらい寝てるよ」

「俺は、13時間寝ていた時ある」

岡本は、この11時から12時の1時間、俺に話してくれた。生い立ちの全てを。天パで苛められていた。お風呂で洗い流してないで、寝ていたらボサボサになったらしく、ばい菌扱いされていた。椅子を持ってマジギレしたことも。女子から被害妄想だからかわれて不登校になった。病院に通っていて、病気が発病し、無理やり学校

を辞めざるを得なかった。俺は、意外にこういう話を聞くと心が凍ったように怒ってしまう、これは変かな？

岡本は案外、楽天家なので、大丈夫だ。こいつはそう簡単に死なないだろう。俺は安心した。

「俺、今日、オールナイトする」

とかいって、12時に布団に入って寝ていた。こういう奴、ムカつく。俺は小学生の時、毎日、2時に寝てたからな。誰も俺の真似は出来まい。オールナイトなんて次の日の夜まで普通続くつーの。俺の睡眠時間は、最高でぶつ通し20時間だったこともある。その時、俺はもう死んだ人間と思われていた。

次の日、俺は、4時に起きた。

「お袋さん、岡本によろしくな。俺はもうこれで」

「鬼ちゃん、また来るのよ」

「鬼ちゃんいうな」

「電車は？もうちょっとゆっくりして行ったら？」

「大丈夫ですよ」

岡本は、それからちゃんと薬を飲み、被害妄想も少し収まったとの事。

それから学校で、岡本に言われた。「病んでる君、どうもありがとう」

「病んでる君？」

「俺が考えた綽名。君は、主治医の息子さんと聞いて、凄いものを感じたのだ。君は、主治医以上の才能があると俺は思ったよ。」

突然ですが、俺は父親の仕事の都合で、福岡に行くことになった。

そこで、また俺んち来てよ」

「今度は、独りで大丈夫だな？」

「薬飲んでるし、大丈夫」

父さん、あんたは嫌いだが、人を救う仕事。なかなかいいじゃないか。俺は、あんたを超す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7312p/>

初めての患者 処女作 & 習作

2010年12月31日01時44分発行